

どうなる？

どうする？

道徳の教科化

教科化によって 授業をどう変える？

小学校では2018年度、中学校では2019年度から、「特別の教科」としての道徳科がスタートする。なぜ教科化されるのか、教科化によって何が変わり、学校や教育委員会はどうか対応すればよいのかを、今号と次号の2回にわたって取り上げる。まず今号は、中央教育審議会道徳教育専門部会委員として、道徳の学習指導要領の改正に深くかかわってきた東京学芸大学の永田繁雄教授に、道徳の教科化について解説いただくとともに、小学校での実践例を紹介する。

有識者インタビュー

私たち教員の意識改革と柔軟な発想で、「考え、議論する道徳」の具現化を

東京学芸大学 教授 永田繁雄

教科化の背景

子どもの心の危機に しっかりと対応するために

道徳が「特別の教科」と位置づけられた背景には、大きく2つの課題があります。1つは、子どもの心の状況です。様々な調査結果から、子どもたちの自尊感情や生命に対する想像力、社会参画意識の不十分さが指摘されており、それがいじめや暴力行為などの問題行動にもつながっていると捉えられています。

このような子どもの心の危機に対し道徳の授業が必ずしも十分に伝えてこられなかったことが、もう1つの課題です。2013年に公表された文部科学省の道徳に関する報告書では、道徳の授業について忌避や軽視化の傾向が指摘されています。道徳教育の意義が十分に受け止められて

いないことから、授業の形式化・形骸化の傾向が見られたのです。それにより、子どもも授業を好きになれず、授業がさらに硬直化するという、負のスパイラルに陥っていました。そうした状況を打開するために、道徳教育の意義や可能性を見直して、魅力ある授業を行い、正のスパイラルに転換することが、今回の教科化の目的なのです。

なお、「特別の教科」とされたのは、中学校でも道徳専門の教員免許を設定せず、評価も各教科とは異なり独自の考えで行うからです。

教科化における変更点

「考え、議論する道徳」に向けて 内容・教材・指導方法を改善

道徳科は、2017年3月の学習指導要領の全面改訂に先んじて、2015



ながた・しげお 東京学芸大学大学院教育学研究科学校教育専攻修了。東京都内小学校教諭、東京都文京区教育委員会指導主事、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官を経て、2009年度から現職。中央教育審議会教育課程部会道徳教育専門部会委員、日本道徳教育学会副会長兼事務局長等を兼任。主な編著書に『小学校新学習指導要領ポイント総整理 特別の教科道徳』（東洋館出版社）、『道徳科』評価の考え方・進め方』（教育開発研究所）など。

年の一部改正の中で「特別の教科」として位置づけられ、その目標が次のように示されました。

「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」*1

このように、道徳科は、道徳教育が育む「資質・能力」である「道徳性」を直接的に耕し育む教育活動の要としての性格がより明確になり、一貫性のある指導が行いやすくなりました。

教科化による変更点として、大きく次の4つが挙げられます。

◎検定教科書の導入

これまでの道徳用副読本は「副教材」としての位置づけでしたが、「特別の教科」となったため、検定教科書を主たる教材として用いることとなります。教科書には、道徳のすべての内容項目を主題として網羅した教材が織り込まれています。

◎内容項目の見直しと体系化

指導内容は、いじめ問題への対応の充実を図り、発達段階を一層踏まえた体系的なものへと改善されました。例えば小学校では「個性の伸長」「相互理解、寛容」「公正、公平、社会正義」「国際理解、国際親善」「よりよく生きる喜び」の項目が学年段階に応じて追加され、小学校低学年は19項目、中学年は20項目、高学年と中学校は22項目となりました。

また、時代の様相を反映し、ESDや情報モラル教育、環境教育、キャリア教育など、今日的な課題への対応も求められています。

◎指導方法の工夫と改善

問題解決的な学習や体験的な学習など、指導方法を工夫することが求められています（詳細は授業づくり

のポイント参照）。

◎記述式による評価

数値による評価ではなく、子どもの成長の様子や学習状況を認め励ます記述式の評価を行うこととされています（詳細は次号で紹介）。

このようなポイントを押さえた授業を展開し、「考え、議論する道徳」を実現することが求められているのです。

授業づくりのポイント① 価値観の形成

授業で目指すのは、全員が自分の「納得解」を持つこと

では、次に、具体的な授業づくりのポイントを見ていきます。

まず、授業の目標は、他者との合意形成や1つの正解に集約すること以上に、一人ひとりの価値観の形成、いわば自分の「納得解」にたどり着けるようにすることが中心になると、改めて意識することが重要です。もとより生活・学習経験は一人ひとり異なり、生き方を支える価値観も多様です。他者とそれを交流し、自分なりの価値観を広げ、深めていくことが、道徳の授業のねらいなのです。

授業では「自分が納得できる答えを見つけてみよう」と声をかけ、考える意欲を引き出していくとよいでしょう。他者と切磋琢磨し合う授業を通して、一人ひとりの答えは自己の納得に向けて磨きがかかり、明確になっていくのです。

授業づくりのポイント② 指導方法の拡充

3つの指導方法を組み合わせ子どもの思考を活性化させる

これまでの道徳の授業では、読み物での登場人物の心情を読み取るような学習が多く見られました。しかし、それだけでは「小さな国語」のような指導になりかねません。

そこで、文部科学省「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」（2016年7月）では、質の高い指導方法として3つの例が示されました（図1）。今まで多く見られた「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」に加えて、「問題解決的な学習」「道徳的行為に関する体験的な学習」を示し、それらを組み合わせた指導を推奨しています。

具体的に言うと、「問題解決的な学習」は、道徳的な問題や課題について、自己への問いかけを深め、議論する中で、自分なりの「納得解」を導き出していく方法です。そのためには、より大きな視点から発問を構想していくことが必要です。

例えば、物語の各場面について「～の時、Aの気持ちはどうだろう」「～ではどう考えただろう」といった時系列に考えさせる「場面発問」は、いわば各駅停車的な小さな発問で、それだけでは問題の追求にはなりません。むしろ、教材の持つ問題、「～にはどんな意味があるのか」「Aが

図1 「質の高い多様な指導方法」として挙げられた3つの授業イメージ

読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習	問題解決的な学習	道徳的行為に関する体験的な学習
教材の登場人物の判断や心情を自分との関わりで多面的・多角的に考えることなどを通して、道徳的価値の理解を深める。	問題解決的な学習を通して、道徳的な問題を多面的・多角的に考え、児童生徒一人一人が生きる上で出会う様々な問題や課題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。	役割演技などの疑似体験的な表現活動を通して、道徳的価値の理解を深め、様々な課題や問題を主体的に解決するために必要な資質・能力を養う。

*文部科学省「『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）」（2016年7月）を基に、永田教授が作成したものを引用。

*1（ ）内は中学校の目標。

大切にしていることは何だろう」「～はどんなことが問題なのか」といった主題や道徳的価値などに着眼した、いわば「テーマ発問」を織り込むと、子どもがより大きな視点で問題を追求するきっかけになります。

発問の大きさは、①「場面を問う（人物の気持ちや行為の理由など）」、②「人物を問う（主人公の生き方など）」、③「教材を問う（教材の意味や持ち味など）」、④「価値を問う（主題となる価値や内容など）」の順に大きくなっていきます。大きな発問ほど、一体的な問題追求の思考を生み出しやすくなるでしょう。

また、「道徳的行為に関する体験的な学習」は、役割演技や劇化、グループワーク、エクササイズなど活動的な手法を生かして、テーマの追求を深める方法です。道徳的行為や活動すること自体が目的とならないよう、学習過程に効果的に取り入れ、道徳的な問題について考えを深められるように促すことが大切になります。

この3つの指導方法は、それぞれが独立した指導の「型」を示すものではないとされています。それぞれの指導の要素を授業の主題や子どもの実態に応じて組み合わせ、先生方の柔軟な発想で多様な指導方法を生み出していきたいものです。

授業づくりのポイント③ 能動的な学び

子どもの問題意識と学ばせたい主題を重ね、主体的に追求させる

子ども一人ひとりが「納得解」を持つことができる授業にするためには、子どもの「主体的な学び」の実現が欠かせません。そのためには、子どもの問題意識が必要です。そこで、子ども自身から問いを生み出せるようにします。

例えば、教材を読んだ後に「どんなことが気になった?」「何を考えた

いと思った?」と発問したり、子どもの経験と結びつけたりします。この「子どもの問題意識」と「教員が学ばせたい主題」との重なりが大きくなればなるほど、学習テーマは鮮明になり、子どもの学習意欲は高まっていきます。

それと同時に、言語活動を生かした「対話的な学び」を通して、子どもの学びの空間を広げていくことも重要です。他者の考えに共感するとともに、互いに学び合うことを通して、道徳的な価値や生き方について深められるように促します。

このようにして、「主体的な学び」が「対話的な学び」によって広がることで、子どもは問題追求の能動的な学びをするようになり、「深い学び」につながっていきます（図2）。

授業づくりのポイント④ 思考を促す発問

発問の立ち位置を工夫し、「多面的・多角的」な思考を促す

「主体的・対話的で深い学び」を促す際に重要なのが、道徳科の目標でも触れられている「多面的・多角的」な思考です。その「多面的」と「多角的」の違いを意識して授業に生かすと、子どもの思考を促しやすくなります（図3）。

「多面的思考」は、1つの事柄について見る立場を変えたり、多くの人

の見方を生かしたりして、対比して掘り下げていく方法です。これは、いわば「みとめあい」の学びと言えます。一方、「多角的思考」は、1つの事柄について自分の考えや生き方の選択肢を主張し合ったり、話し合ったりして、より明確化する方法です。こちらは「みがきあい」の学びと言えます。

これらの思考を促す鍵は、発問です。例えば、発問をその立ち位置によって「共感的」「分析的」「投影的」「批判的」の4つに区分し、それを問題追求の視点に生かすことで、同じ題材でも子どもの見る視点が変わり、思考が活性化するはず（図4）。

教科化に向けた準備

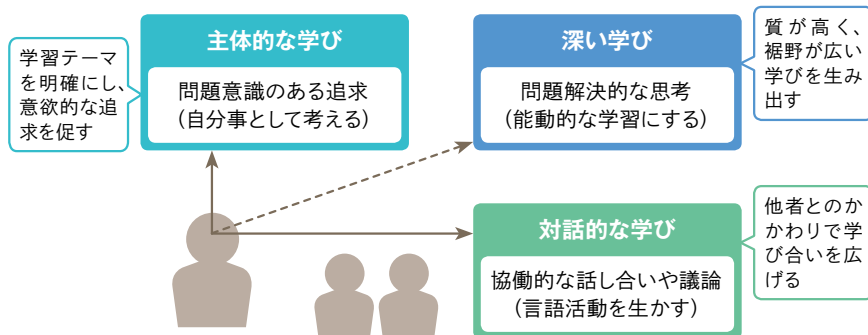
年度内の指導計画立案に向け、教育委員会が各校の支援を

◎各校における準備

2018年度に教科化が始まる小学校では、本年度の後半は使用する教科書の内容を吟味し、道徳教育の諸計画を整備する時であると言えます。

教科書は主たる教材としての使用義務がありますが、道徳科の特性に鑑みれば、地域素材や郷土資料など多様な教材をその一部に生かすことも大切であることが学習指導要領などに明示されています。例えば、地域の発展に貢献した名士の話や、環境問題などの現代的な課題、放送教

図2 「主体的・対話的で深い学び」の姿（考え方の例）



「主体的な学び」を縦軸、「対話的な学び」を横軸として捉えると、「深い学び」をつくり出す手法をイメージしやすい。
* 永田教授提供資料を基に編集部で作成。

材など、各校で独自かつ重点的に取り上げたい内容もあるはず。それらも含めて検討し、道徳教育の全体計画と道徳科の年間指導計画を立てていきます。教科書使用を進めつつ、年度途中で柔軟に計画を見直し、学校や地域の特色を織り込んでいく

という方法も考えられます。

また、授業の一部を学年の他のクラス担任や専科の教員が巡回しながら担当する方法も、道徳科の活性化に有効だとされています。

◎教育委員会の支援

各校の準備にあたっては、教育委

員会の支援も欠かせません。例えば、次のようなことが考えられます。

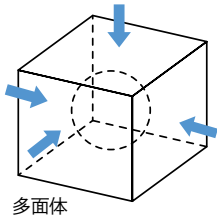
- ①学校としての道徳教育の方針を改めて明確化させる。
- ②道徳教育推進教師を中心とした指導体制を、学年部などの分掌も生かして整備することを促す。
- ③全体計画・年間指導計画作成に向けて、例えば、文部科学省や教科書会社等の発信情報などを整理して提供し、支援する。
- ④授業実践に関する研修会などで、指導改善や評価の仕組みをつくるためのモデルを示す。

まず教育委員会としての方針や方向性を固めた上で、各学校・各地域の課題に応じた準備を後押ししていただければと思います。

図3 「多面的・多角的」な思考とは? (考え方の参考例)

多面的思考 主として「みとめ(深め)あい」

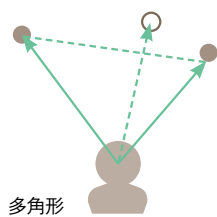
◎主に、1つの事柄(道徳的価値など)について、見る立場を変えたり、多くの人の見方を生かしたりして、対比させ合い、深め、掘り下げること。



主に、分析的思考

多角的思考 主として「みがきあい」

◎主に、1つの事柄(道徳的価値など)について、自己の考え方の主張や生き方の選択肢を他の人と対立させ議論し合うなどして、より明確にすること。



主に、選択的思考

*永田教授提供資料を基に編集部で作成。

図4 発問の立ち位置の4区分と、多面的・多角的思考(見方の例)

互いの考えの違いが大切にされる「みとめあい」の思考が多い

主人公の心情・考えを明らかにする
 人物・お話などの意味を明らかにする
 主として多面的思考



意見の対立やジレンマ・選択肢が強調される「みがきあい」の思考が多い

*永田教授提供資料を基に編集部で作成。

教科化に向けたメッセージ

教科化をチャンスとして、新しい指導のあり方を考える

道徳の教科化を機にまず求められているのは、教育に携わる私たち一人ひとりの意識改革だと言えます。子どもの伸びる力を信じて、子どもができるように、柔軟で開発的な発想を持つことが重要です。

道徳教育は、教育全体に大きな力をもたらします。実際、道徳科の研究指定校の多くで、学力の向上が見られます。道徳教育の充実によって、教員がより子どもへの共感的な対応ができるようになり、子どもも自尊心を高め、自己の学び方や生き方を一層大事にするようになるからです。また、そうした子どもの変化を見て、家庭や地域の人々もその教育力を一層発揮するようになります。

道徳教育の持つ底知れない魅力と可能性を信じて、その活力を引き出すために、このビッグチャンスを生かしていきたいものです。

発問の工夫で多面的・多角的な思考を促し 一人ひとりを納得解に導く

埼玉県 越谷市立大沢小学校



◎ 1877 (明治 10) 年開校。教育理念は、「学校とは、子どもの尊い命と無限の可能性をあずかることである」。

校長 藤澤由紀夫先生

児童数 449 人

学級数 17 学級 (うち特別支援学級 4)

電話 048-974-8522

URL https://school.city.koshigaya.saitama.jp/osawa_e/

教科学習や特別活動など 教育活動全体で道徳性を育む

越谷市立大沢小学校は、生活面に課題が見られたことを機に、約30年前から道徳教育の研究に取り組んでいる。「道徳の時間」を中心に教育活動全体で道徳性を育む「総合単元的な道徳学習」を設置。全体計画を基に、各学年で重点化したい内容を年間テーマとして設定している。例えば、2017年度の6年生の年間テーマは、「自己を見つめ、生き方を考え、共に高め合える児童をめざして」とし、主に「自分自身に関すること」の領域に重点を置く。6学年主任の高橋健司先生は次のように語る。

「2016年度末に子どもの実態を話し合った際、主体性の弱さが課題に挙がりました。そこで、自ら考え行動する力を育むために、自分を見つめ直す機会を多く設けています」

学期ごとに指導計画を作成し、「道徳の時間」で学習する内容を、他教科や特別活動、給食、日常生活などのあらゆる場面で関連づけて指導できるようにしている。藤澤由紀夫校

長はこう説明する。

『道徳の時間』で学ぶだけでは、なかなか行動には結びつきません。他教科の授業や生活全般を通して学び、実践する中で、意識は育まれるものです。『今の時期は集中的にこういう心を育てよう』といった方針を明確にし、指導を一貫させています」

「発問」を中心に 授業の内容や流れを検討

「道徳の時間」は、教員の発問を軸に構成される。年間指導計画には、授業の中心となる「テーマ発問」に加え、主な発問例を明記している。

「道徳の学びを充実させる鍵となるのは、教員の発問です。ねらいを意識し過ぎず、子どもの多面的・多角的な思考を促すようにして、多様な考えの中から『自分なりの答え』にたどり着かせる授業を目指し、発問を工夫しています」(藤澤校長)

教員は、毎授業のテーマ発問を記録し、その発問で子どもの思考や議論を活性化させることができたかを3段階で自己評価して、次年度の計



校長

藤澤由紀夫

ふじさわ・ゆきお

埼玉県公立小学校教諭を経て、現職。埼玉県道徳教育研究会副会長兼事務局長。



教諭

小森千奈美

こもり・ちなみ

道徳主任。4学年主任。道徳主任として、全校の道徳教育を牽引。



教諭

高橋健司

たかはし・けんじ

研修主任。6学年主任。道徳に関する研修を取りまとめ、全校の連絡調整を行う。



教諭

前田友美子

まえだ・ゆみこ

2学年主任。低学年の道徳教育を牽引。2017年度、市の道徳教材作成委員として、郷土資料を作成。

面に反映させている。

授業は、全学年共通の「道徳の時間(道徳科)のスタンダード」(図)を基に、各教員が柔軟な発想で自由に展開していく。

導入の「気づく」では、学習テーマに関する問題意識を喚起する。道徳主任の小森千奈美先生はこう語る。

「まず、子どもが『これを考えたい』と思えるよう、主題に関連する体験を思い出させたり、社会問題を取り

図 「道徳の時間（道徳科）のスタンダード」

導入	気づく	◎学習の動機づけを図る。 ・本時の課題は何か、どんなことを学習するのかという関心と期待を持たせる。 自分と深いかかわりがありそうだと意識させることも大切。 ・この段階で、学習課題を設定する場合もある。
		◎ねらいを達成するための中心となる段階。 ◎子どもが、道徳的価値の理解を基に自己を見つめる。 ①教材から主題について考える上で、理解の手助けとなるように条件や状況を押さえる。 ②読み聞かせをする（ペープサート、紙芝居、パネルシアター、視聴覚機器などの活用）。 ③話題を児童の興味・関心を基に整理する。
展開	深める	◎教材を基に話し合う。 【話し合いの留意点】 ・教材に描かれた道徳的価値に対する一人ひとりの考え方や感じ方を生かして話し合う。 ・様々な考え方に触れさせ、多面的・多角的に考えられるようにする。 ・自分とのかかわりで道徳的価値を理解できるようにする。 ・自己を見つめられるようにする。 【発問の留意点】 ・授業のねらいや主題と深くかかわる「中心的な発問」に時間をかける。 ・考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えさせる発問などを心がける。 ・「中心的な発問」とその前後の発問を一体的に捉える発問を構成する。
		◎学習を基に、自己の生き方を振り返る。 ・日常生活に目を向けさせる、今までの自分を見つめさせる。 これからの生き方につなげて考えさせる。
終末	あためる	◎ねらいの根底にある道徳的価値に対する思いや考えをまとめたり、道徳的価値を実現することのよさや難しさなどを確認したりして、今後の発展につなげる。 ・本時のまとめを書く ・感想発表 ・ゲストティーチャー ・「私たちの道徳」 ・説話・ことわざ・名言 など。

*大沢小学校提供資料を基に編集部で作成。

上げたりして、自分とのかかわりを意識させます」

「とらえる」では、教材を提示し、読み聞かせなどをしてから、子どもの関心を整理する。その際に重視するのは、教員が考えさせたい主題と子どもの問題意識を重ね合わせていくことだ。2学年主任の前田友美子先生はこう説明する。

「『気になるころはありましたか』と問いかけたり、読み聞かせ中の子どものつぶやきを拾ったりして、子どもの関心を探ります。その後の話し合いが活性化するように、子どもの問題意識と主題を結びつけています」

「深める」では、教室全体で机をコの字型に配置して話し合う。一人ひとりの考え方や感じ方を生かし、多面的・多角的に考えられるよう促す。

「多様性を重視すると、ねらいにたどり着かず『これでよかったのかな』ともやもやしてしまう授業もあります。ただ、校長の『どんどん失敗し

てよい』という言葉を励みに、試行錯誤を重ねています」（高橋先生）

教員がともに悩み、考える姿を見せることで、子どもたちは「道徳の解は1つではない」「自分で考えることが大切だ」と実感し、理解していくという。また、子ども同士の意見をつなぐことも大切にする。

「教員が子どもの考えに関心を持ち、『それはどうして?』と掘り下げていくと、最後に芯となる思いを話すことがよくあります。そうした発言をほかの子どもに投げかけて、話をつなげていきます」（高橋先生）

「見つめる」では、日常生活に目を向けたり、自己の生き方を振り返ったりする。そして、最後の「あためる」では、まとめを書いたり、感想を発表したりして、今後の学びにつなげている。

同校は、これらの取り組みを校外にも積極的に発信している。全教員が年1回、必ず公開授業で道徳の授業を行い、保護者にも授業に参加してもらおう。また、学期に1回、「道徳だより」を家庭と地域に配布し、授業や活動の内容を紹介する。

「道徳教育は、日常生活につながっていますから、家庭や地域と一緒に子どもを育てる視点を持つことを大切にしています」（小森先生）

子どもの成長につながる指導への挑戦を続ける

同校が道徳教育の成果として捉えているのが、子どもの自己肯定感の高さだ。学校独自のアンケートでは、「学級の中で自分らしくいられる」「自分にはよいところがある」といった質問の肯定率は約8割に上る。また、6年生では、文部科学省「全国学力・学習状況調査」で、約95%が「将来の夢や目標を持っている」と答えた。

このような前向きな気持ちが学習意欲につながり、学力も安定している。また、日常生活の中で、思いやりや優しさが育っていると感じる場面も多いという。

一方、教員の異動もある中で、道徳教育への意識や取り組みの差をなくしていくことが、今後の課題だ。

「まずは、全教員が失敗を恐れず、様々な指導に挑戦し続けることが大切だと考えています。子どもは、先生が一生懸命だと分かれば、自分も一生懸命に取り組もうとします。また、子どもの学力や学校生活、家庭生活の向上といった明瞭な変化にしっかり結びつけていくことを常に意識し、さらに取り組みを発展させていきたいと考えています」（藤澤校長）